

どんど焼

野村胡堂

—

「あ、あ、あ、あ、あ」

ガラツ八の八五郎は咽喉のどほとけ仏の見えるような

大欠伸おおあくびをしまし

た。

「何と言う色気のない顔をするんだ。縁先で遊んでいた白犬しろが逃出したじゃないか、手前てめえに喰いつかれると思ったんだろう」

どんど焼

のんびりした春の陽ざしの中に、銭形平次も年始疲れの、少し

ならづけ

奈良漬臭くなつた足腰を伸ばして、寝そべつたまま煙草の烟けむりの行方を眺めていたのです。

「だがね、親分、正月も三ガ日となると退屈だね。金はなし、遊び相手はなし、御用はなし、——そこで考えたんだが、二度年始廻りをする術てはないものでしょうか——明けましてお目出とう、おや八さん、昨日も年始に来たじゃないか、へエー、そんな筈はないんだが、あつしは暮から風邪かぜを引いて今日起き出したばかりですよ、それは多分八五郎の偽者でしょう——なんて上り込む工夫はないものかな」

どんど焼

八五郎イマジネーションの想像は、会話入りで際限もなく発展して行きます。

「馬鹿野郎、——よくもそんな間抜けな事が考えられたものだ」
「——それも樽たるを据えた家に限るね、一升買いの酒じゃ、飲んで
も身にならねえ」

「呆れた野郎だ」

「でなきやア、御用始めに、眼の玉のでんぐり返るような捕物は
ないものかなア。親分の前めえだが、今年こそ、うんと働きますぜ。
江戸中の悪党が、八五郎の名を聞いただけで眼を廻す——てな事
になると——」

「八、気を付けるがいいぜ、雪のない正月で、いやにポカポカす
るから」

「ね、親分、今度はあつしに任せて下さいな、どんな事でも、一人で捌さばいて世間の人をアツと言わせますから」

「いい気のものだ、——おや、そう言えば御用始めらしいぜ、手前逢つて見るか」

平次が隣室となりに隠れる間もありません。バタバタと入つて来たのは、若い男。

「銭形の親分さん、た、大変、——すぐお出で下さい」

突きのめされそうな声です。二十五六、おおだな大店の手代風ですが、

よほど面くらったものと見えて、履物はきものも片跛かたちんぼ、着物の前もろくに

どんどん焼
合っておりません。

「お前さんは、どこから来なすったえ」

八五郎は精一杯の威儀いぎを作ります。

「安針町あんしんの、さ、相模屋さがみやからめえりましたが、——わ、若旦那が

昨夜——」

手代はゴクリと固唾を呑みました。

「これを飲んで少し落着いてから話すがいい。そうあわてちゃ却って筋が通らねえ」

平次がぬるい茶を一杯くんで出すと、それを一と息に呑みほして、暫くホツと胸を撫でおろします。

「若旦那がどうした——」

と平次。

「昨夜殺されましたよ」

手代はぞつと身を顫わせます。

「昨夜殺されたと、何だつて今頃あわてて飛んで来るんだ。あの
辺は第一、小網町こあみちようの仙太の縄張じゃないか」

ガラツ八は少しむくれて見せました。

「そう言うな、八、——ね番頭さん、お前さんが下手人の、疑い
を受けたんだらう」

「えッ、どうしてそれを、親分さん」

「昨夜ころの殺しを、今頃あわてて俺のところへ言つて来るのは、よ

くよくよく困ったことがあるからだろう」

平次は落着いた調子で凶星を指します。

「小網町の親分が、——一人も外へ出ちゃならねえ、世間の口へのぼる前に、下手人を捜し出すから——って」

「仙太兄哥のやりそうなことだ、——ところでどんな事になって
いるんだ、詳しく話して見るがいい、次第によっちゃ、——お前めえ
さんが本当の無実なら力になって上げないものでもない」

「有難う存じます、——私は相模屋の手代の与母吉よもきちと申しますが、
災難はどこに転がっているかわかりません。こう言うわけで——」

焼どんどん

手代の与母吉はようやく落着いて話し始めました。

安針町の相模屋の若旦那の勘次郎は、正月二日の晩、離屋はなれのよ
うになつてゐる別棟の二階六畳の部屋で、小型の出刃庖丁ほうちょうに喉笛
を刺され、冷たくなつてゐるのを、嫁のお清が見つけた、大變な騒
ぎになりましたが、小網町の仙太が駆けつけ、内々検屍けんしだけを済
ませて、嚴重に口止めをしたまま、下手人の探索を続けているの
でした。

どんど焼

勘次郎は二十三になつたばかり、日本橋業平なりひらと言われた好い男

で、ずいぶん罪も作った様子ですが、一年前に遠縁のお清を嫁に貰ってから、これが思いの外の氣象者で、巧たくみに勘次郎の浮気を封じ、大した噂もなく過しておりました。

「近頃は、女出入では人に怨まれるような筋はございません。——そこで仙太親分は、若旦那と一緒に育つて、お清さんに思いを掛けたことのある私が、怪しいと、睨みなすったわけで——」

与よもきち母吉は泣き出しそうでした。

「それは、どんな御用聞でも考える筋だ、——ところで、お前さんは今嫁のお清さんを何とも思っちゃいないのか」

平次は要領の搜さぐりを一本入れました。

「思わないわけじゃ御座いませんが、主人の嫁ではどうにもなりません。お清さんが行儀見習で、相模屋に三年もいたんですから、昔思いをかけたのが怪しいと言え、店中潔白なのは一人もありません」

「なるほどな」

「もつとも、三ガ日は休みも同様で、ゆうべ店にいたのは私と小僧の寅松と二人きり、納屋の方には人足が二三人いたようですが、これは棟むねが違いますから、裏からこっそり入って、若旦那を殺してそつと帰るわけには参りません」

「親旦那や、下女がいるだろう」

「御親類の方が年始に見えて、親旦那はそれを相手に、奥で飲んでいらつしやいました。夕方から酒が始まって、お客の帰ったのは亥刻頃、——お清さんがそれから間もなく、若旦那の殺されているのを見つけたので御座います」

「奉公人は？」

「みんな出払って、店には私と寅松だけ、嫁のお清さんは客の相手で、お勝手には飯炊きのお熊どんと行儀見習に下田の取引先から来ているお浜さんが、爛かんをつけたり、料理の世話をしたり、一寸の暇もなく立働いていたそうでございます」

「殺された若旦那は、宵から二階などへ上がっていたのか——こ

の節は御触れがやかましくて、町家の二階では灯あかりを点けてならぬことになつてゐる筈だが——」

万治三年は正月から大火があつて、湯島から小網町まで焼き払い、二月は人心不安のため將軍日光社参延引しょうぐんにつこうしゃさんえんいんを令し、六月には大坂に雷震、火薬庫が爆発し、とうとう江戸町家の二階で紙燭ししよく、油火あぶらひ、蠟燭ろうそくを禁じたのです。

「年始疲れと二日酔の気味で、日暮前から離屋の二階で休んでいました」

「その離屋は、母屋おもやの者に知れずに外から出入りが出来るかい」
「雨戸は酉刻前むつに締めます。用心のやかましいお店ですから、外

から離屋へ出入は出来ません」

「中にいる若旦那が開けてくれたら——」

「そんな事はございません、締りは内からしてありますし、若旦那は二階で殺されておりました」

「母屋からは？」

「三尺の廊下で続いております。土蔵の前を通って、これはわけもなく行けます」

与母吉の話で、大体の様子は判りますが、下手人の見当までは、銭形の平次でもつけようがなかったのです。

焼どんどん

「八、——てめえ手前一人で行って見るがいい、望み通り、眼の玉がで

んぐり返るような話らしいぜ」

「へエ——」

そう言われてみると、八五郎も少しばかり不安がないでもありません。

「親分は？」

与母吉は不安らしく平次を顧みました。あまり賢そうに見えないガラツ八にゆだ委ねるのが、何としても心配でならなかつたのでしよう。

どんど焼
「俺が行っちゃ、仙太兄あにい哥に悪かろう。八五郎で手に負えなくなるまでは顔を出したくない」

「――」

与母吉は押してとも言いかねた様子で、ガラツ八と一緒に、安針町の店へ帰って行きました。

三

「番頭さん、どこへ行ったんだ、俺の言うことを聴かなきゃア、縄アつけて引立てなきやならないが」

よもぎち

与母吉の顔を見ると、仙太は以ての外の様子でこう極めつけました。その後から相模屋の敷居を跨またいだガラツ八は、厭も応もな

く、それと顔を合せてしまったのです。

「小網町の親分、——これはあつしのせいだ、勘弁しておくんなさい」

「おや、銭形親分のところの、八五郎兄あにい哥か。大層鼻が良いようだが——」

仙太は苦り切ります。

「ツイ日本橋に用事があって来ると、そこで与母吉さんに逢つてネ、——なアに、前から少しばかり知っているんだ、——大層顔色が悪いから、どうしたのかと訊くと、こうこう——」

八五郎もなかなかうまい事を言うようになりました。

「うまく言うぜ——まあいい。どうせ銭形の兄哥にも来て貰おうかと思つているところだ。差し当り一の子分の八五郎兄哥の見込みを聴かして貰おうじゃないか、近頃は大した評判だぜ」

仙太は日本橋界限を縄張にしておりますが、向う息の荒い割には氣の良い男で、平次の腕には、及びもつかぬことをよく知つていたのです。

「それほどでもないが」

ガラツ八は長い頤あごを撫でます。

店には二三人の番頭がおりますが、それはゆうべの事件とは関係のない者ばかり、宵の行先は仙太の手で調べて、一人残らず

解っておりますが、さすがに恐ろしい事件のあっぱくかん圧迫感で、青白く緊張した顔を見合せて、言葉少なに慎しんでおります。

「とんだ事でしたね、旦那」

奥で火鉢に頤を埋めるように、深々と思案に暮れているのは、主人の勘兵衛でした。まだ五十五六の働き者ですが、親一人子一人の倅をうしな喪つて、さすがにがっかりしております。

「有難う御座います、——御苦労様で——」

「下手人の心当りはありませんか」

「それがあれば宜しいでしょうが——何分私は二た刻もお客の相手をしていましたんで——」

ガラツ八の恐ろしい愚問に舌を巻きながらも、商人らしく、勘兵衛は素直に相槌あいづちを打ちます。

小僧の寅松は庭を掃いておりましたが、これはやっと十二、人を殺す年でも柄でもありません。

「あれがお清さんとか言う？」

お勝手から出てきた若くて美しい女を、薄暗がりの中にガラツ八は指しました。

「いえ、お浜と言って、行儀見習に下田の取引先からきている娘ですよ」

どんど焼

勘兵衛は訂正ていせいしてくれませす。そう言えば、美しさも、身扮なりの整つ

かかわ
ているにも拘らず、眉も齒も、娘姿に間違いはありません。

「下田から——？　いつ頃から来ていなさるんで」

「半歳ほど前でした、——十九の厄やくで、年を越さないうちは嫁にもやれないから、暫らく江戸の水を吞ましてくれという親元の頼みでしてな」

勘兵衛はそう説明しているうちに、お浜は自分の噂に追われて身を細らせながら、奥の方へ消えます。そう言えば心持野暮ったいところはありますが、いかにも健康そうで、ハチ切れそうな美しい娘です。

どんど焼

「あれは間違いもなくお熊さんでしょう」

お勝手に居る四十恰好かっこうのお熊さん——耳の少し遠いのをガラッ八はのぞくようにしました。

「もう十年も奉公しております、家の者も同様の女で——」

「お熊さん、ゆうべ離屋の二階へ行った人は誰と誰だい」
ガラッ八はもつともらしく訊ねました。

「御新造さんと、お浜さんが一度ずつ行ったようですよ。御新造さんは酉刻半むっはんごろ様子を見に行つて、若旦那様が頭痛がすると仰しやるんで、窓を開けて来なすつたとかで、それから半刻ばかり経つて、お浜さんが閉めに行きましたよ」

「二階の窓が開いていたのか？」

「開いていたって曲者の入れる気遣いはないぜ、梯子はしごがあるなら
知らず」

仙太はガラツ八の間抜けさを笑っている様子です。

「梯子を持って来て掛けたとしたら？」

「二階を見てからそんな事を言った方がいいよ。梯子なんか持つて入られる場所じゃねえ、それに、雨戸はお浜さんが閉めて来たんだ、その時まで若旦那はピンピンしていたんだぜ」

そう言われると一句もありません。

「お浜さんが——」

ガラツ八はまだ腑に落ちないものがある様子ですが、

「お浜さんが一応疑われるわけさ、が、正面から喉笛のどぶえへ突き立てた出刃が、後ろへ突き抜けるほど深く刺してあるんだぜ、全く恐ろしい力だ。誰が見たって、女や子供の手際とは思わないよ、——まさか、咽喉笛へ出刃を当てさしてよ、槌つちで叩かせる者もあるめえ」

「なるほどね」

仙太の話の聞くと、お浜には少しの疑いも掛けていません。

「それに、正面からあれだけの事をやって、返り血を浴びない筈はない、——お浜の着物は残らず見たが、汚点しみ一つないよ」

最後の止めを刺されながら、ガラツ八は離屋はなれに向いました。納

戸の前から、土蔵の前を通って、三尺の廊下の尽きるところに、離屋の二階の登り口が開きます。

上には親類の年寄が二三人と、嫁のお清が、まだ入棺にゆうかんも済まぬ死骸の前に、湿しめつぽく坐つて引つきりなしに線香を上げているのでした。

「御骨折で——有難う存じます」

お清はふり返つてガラッ八に挨拶しました。二十歳はたちと言うにし

ては少しふけておりますが、抜群、、、のきりようで、身体、のひ弱さと反対に、気象はすぐれているらしく、この騒ぎの中にも、いちばん取り乱した様子はありません。

「とんだ事ですね、——ゆうべ、一番後で逢った時は、どんな様子でした」

とガラツ八。

「寝やすんでおりましたが、——私が行くと眼を覚して、少し頭痛がするから、窓を開けてくれと申しました」

言葉少なに、窓を指します。

敷居に飛沫しぶいた血潮は、大方拭き取ったようですが、まだ生々なまなましく残って、何となくぞつ、とさせます。

二階に面へだしておりますが、左右の木戸が狭いのと、空地一杯に商

売用のガラクタで、三間梯子などを持ち込めないのは、たった一眼でわかります。その上窓の下は切立てたような壁で、這い上がるたよりもありません。

曲者が窓から入ったのでないことは、お浜の証言がなくとも、あまりに明かあきらです。

「この通りだ、見てくれ、八兄あにい哥」

仙太は線香を一本上げると、片手拝みに近づいて、死体の上の白布を取りました。

「ウム」

ガラツ八が唸ったのも無理はありません。恐怖に歪ゆがんだ勘次郎

の死顔は、男が好いだけに一ときわ物凄く、少し左に寄った頸筋は、細目の出刃に割かれて、凄まじい口を開いているのです。

「どうだ、女や子供の力ではあるまい」

仙太はそう言いながらお清の顔を見ました。

「出刃庖丁はどうしたんだ」

「ここにあるよ」

「どれ」

白い晒木綿さらしもめんに包んだのは、どこのお勝手にもあると言うもので

はなく、時々さしみほうちょうは刺身庖丁の代りにもなったらしい、細作りの出刃

で、血に染んで惨憺たる色をしておりますが、よく砥とぎ澄ました

ものらしく、紫色にギラギラと光っております。

「どうだい八兄哥、これじゃゆうべ戌刻いっつから亥刻よっ（八時から十時）までこの家にいた者で、人の頸くびへ正面から三寸も出刃を突き立てる力のある者が怪しいということになるだろう」

「その通りだ」

仙太とガラツ八は、離屋を引揚げて、土蔵の前から、空地へ降りて来ました。

「親旦那は倅を殺すわけはないし、小僧の寅松は十二だ。客は酔っていたし、一度も席を立たないとする、どうだ八兄哥、手代どんどの与母吉があやしくなるだろう。あの野郎は嫁のお清がこの店

へ行儀見習で来ている時から夢中だったんだ」

仙太に言われて見ると、ガラッ八もツイそんな気になります。

「そうかも知れない——が、ついでに奉公人達に逢って見よう」

「初荷の仕事はあったが、手燭がうるさいから、夜業はしねえ、

——ゆうべ納屋に来たのは、仁助と吉三郎の二人つきりだ」

「そいつに逢って見よう」

「足止めをしてあるから、来るがいい」

二人はそのまま納屋へ入って行きました。納屋と言っても、乾

焼どん物の荷物を扱う定雇いの人足が二人三人は泊まれるようになっているので、裏の方には二畳ほどの部屋を取って、寝道具もひと

通りは揃えてあります。

「へエ——、ゆうべここにいたのは、私と、この吉三郎だけで——、朝から飲み続けて、日の暮れる頃はもう高軒たかいびきでした、何にも存じませんよ」

信州者だという仁助は三十二三、いかにも酒好きらしい、一と癖も二た癖もある赭あから顔の男です。

「二人共外へは出ないんだね」

「亥刻よつ過ぎに、御新造さんの声で眼を覚ましました、——何しろ大変な騒ぎで——」

どんど焼

吉三郎は少しおろおろしております。相模者さがみものだという、これは

二十三四の平凡な男です。

仙太とガラツ八は二人に案内さして、乾物臭い納屋かんぶつの二階に登りましたが、勘次郎の殺された部屋とは四間余り隔てて、ここからは鉄砲でなければ、人一人を殺せる道理はありません。

四

「親分、こんな事だ、——まるで見当がつかねえ」

ガラツ八の八五郎は、それから半刻も経たないうちに帰つて来
ました。

「一人で捌さばいて、世間をアツと言わせる筈だったじゃないか、遠慮することはないよ」

平次は意地悪く動こうともしません。

「そんな事を言わずに、ちよいと行ってやって下さいよ、——仙太兄あにい哥は、与母吉を縛わってしまいましたよ」

「俺が行ったところで、それより解る道理はない、誰か下手人を庇かばっているんだ」

「へエ——、そんな事がどうして解るんで」

「テニヲハの合わない殺しがあったら、そう思え。与母吉でなきやア、女三人のうち、誰かが下手人を知っているに違ちがげえねえ」

「だから行って見て下さいな」

「厄介な野郎だ、そんな事じゃ、いつまで経っても、一人立ちは出来ないぜ」

「へエ——」

叱られながらもガラツ八は、いそいそと先に立ちました。

相模屋へ着いたのはもう夕刻、大きな門松を潜つて入ると、中は御通夜おつやの支度で、勘次郎の死体を階下したに移し、昼来た時とは打って變つて賑やかになつております。

「親分、旦那に逢いますか」

「いや、納屋と外廻りを先に見よう」

平次は店口からすぐ裏へ廻って、勘次郎の殺された部屋の下へ立って見ましたが、ガラツ八が説明した通り、ここからは梯子はしごがなければ二階へ入る方法はなく、梯子があつたところで、狭い木戸や土蔵の間を、人に知られずに持ち込む工夫はありません。

「お」

「親分、血じゃありませんか」

「そうだよ、だから明るいうちに外廻りを見ようと言つたんだ」
窓の下においた乾物の俵の端っこに、ほんの二三点、飛沫しぶいたように黒くなっているのは、馴れた者の眼から見れば、まぎれもなく血の跡です。

「ここじゃ生物なまものは扱わないだろうな」

「そりゃ親分」

言うだけ野暮で、相模屋は聞えた乾物問屋ですから、血したたの滴るような魚を扱う道理はありません。

「その辺りを丁寧に探して見な、何かあるかもしれぬ」

平次に言われると、八五郎は馴れた獵犬のように、眼の及ぶ限りを捜し廻りましたが、それっきり、あとは何んの変ったものもなかったのです。

納屋へ入ると、仁助と吉三郎は足止めを喰って、すっかりしよげ悄気返っております。

「正月の三日ですよ、親分、足止めは殺生せつしようじゃありませんか」

そう言う吉三郎が、若くて遊び好きそうに見えるのも不憫ふびんです。

「まあ、長い事はない、辛抱するがいい、ところで二階へ行つて見るが、二人共いっしょに来て貰おうか」

「へエ——」

平次はガラツ八と仁助と吉三郎を従えて、ガタピシする梯子を踏んで二階へ登りました。

「なるほど、ここからは手が届かない」

窓を開くと、勘次郎の殺された部屋までは四間あまり、ここから向うへ届くような踏板もなく、まず綱でも張って、かるわざ軽業の太夫

でも伴れて来なければ、向うへ渡る見込みはありません。

「親分、母屋おもやへ行きましょう」

ガラツ八は、平次の落着き払った様子が不思議でならなかつたのです。

「まあ急せくな、——ところで、二人のうち綱渡りの出来るのはないだらうな」

「冗談で、親分」

「冗談じゃないよ、綱を張って渡る工夫ができれば、向うの窓へ楽に行ける」

平次は日本一の真顔でした。

「あつしは獵師の真似をしたこともありますから、鉄砲なら撃てますが、綱渡りなんて芸はありません、——吉三郎は魚取りの方で、相模湾で波の上は渡ったでしょうが、これも綱を渡った話は聞きませんよ」

仁助は少し向つ腹を立てた様子です。

「獣や魚を相手に暮したら、刃物を抛ほおることもあるだろうな」

「そりゃありますとも」

「手槍とか、鋸もりとかを——」

平次の調子は滑かです。

「出刃庖丁は抛りませんよ」

仁助は恐ろしくきかん気です。

いのししまぐろ

「猪や鮪へ出刃庖丁を抛った話は聞かないな、ハッ、ハッ、ハッ」

平次はカラカラと笑いました。

「手槍がありや抛ってお目にかけますぜ、猪や熊だつて一と突きだ、人間なんざ甘めえもんで」

仁助がヌケヌケとそんな事を言うと、

「兄哥、余計なことは言わない方がいいぜ、俺だつて、銚もりなら抛るが」

吉三郎はニヤリニヤリしております。

五

家へ入って、ガラツ八がやったように一人一人当って見ましたが、別に変った手掛りはありません。

離れの二階へ行くと、もう薄暗くなりましたが、それでも、窓から畳の上へ、まざまざと血の痕があと残っております。

「拭かなきゃアよかったなア」

平次は窓のあたりを覗いておりましたが、やがて、雨戸と障子を閉めて、薄明りの中からすかしております。

どんど焼
「八、これに気がつかなかったか」

「何です、親分」

「障子にも雨戸にも血が着いていない」

「なるほど」

「窓の下の空地には血飛沫ちしぶきがあつたろう」

「――」

「勘次郎が殺された時は、窓が開いていたんだ」

「それはどう言うことになるでしょう、親分」

「それから、寝ていてやられたんではない、立っているところを

やられたに違いない」

「――」

どんど焼

窓に掛つた血から判断すると、それ位のことは直ぐ判る筈なのに、——ガラツ八は凡そ酸っぱい顔をしました。

「お清さんと呼んで来てくれ、それから、お清さんが済んだら、お浜を呼ぶんだ」

「へエ——」

ガラツ八は母屋へ行つて、まもなくお清を呼んで来ました。が、その時はもうすっかり暮れて、お互の顔もはつきり判りません。

「灯りを持って参りましょうか」

「いや、二階の灯は御法度だ、——それはいいが、お清さん、こんな事は訊きにくいが、勘次郎さんに近頃親しい女はなかったの

かね

「――」

「隠さずに言って貰いたいが――」

どんど焼



©2017 萩 袖月

お清は暫らく躊躇ちゆうちよしておりましたが、やがて思い定めた様子で、

「お浜が、——あの」

「そんな事ではないかと思つたよ、——」

「これは内証にして置いて下さいませんか」

「いいとも。ところで、——ゆうべお浜は幾度ここへ来たか、——」

「お前さんは知らない筈はないと思うが、——」

自分の夫と変な素振りのある女の挙動を、お清が見のがす筈はありません。

「一度——いっつ戾刻いっつ過ぎに来たようでした」

「長く二階にいた様子はなかつたらうか」

「え、ほんのちよいとで」

「様子は」

「落着いてはおりましたが、青い顔をしていたような気がします」

「その後で何か粗忽そこつをしなかつたろうか」

「気丈な娘ですから、もつともちよつと外へ出て風に吹かれたようでしたが」

人一人を殺せば、茶碗を落すとか、物を転がすとか、何か一位は粗忽をするだろうと思つたのでしよう。平次の考えそのような事でした。

どんど焼

「外に気をついたことは？」

「何にも御座いません」

「どうも有難う——だんだん判つて来るような気がする」

お清が下へ降りて行くと、入れ違いにお浜が昇つて来ました。

お清の知的な美しさにくらべて、健康そうな多血質なお浜は、別種の美しさを持った娘で、気の多い勘次郎に付け廻されたのは無理のないことでした。

「お浜さん、だいぶ若旦那と親したしかつたそうだが、ゆうべ、何か混み入つた話をしたのかい」

平次は齒きぬに衣着せずきぬに浴びせかけます。

「いえ、——御新造さんが、そんな事を言うんでしょう」

「お前は、もう少しいろいろの事を知ってる筈だ、——第一、あの庖丁は誰のだ」

「知りませんよ」

「江戸では滅多に見かけない形だが——」

「——」

妙な睨み合い、——空気はしだいに硬張るこわばばかりです。

「ね、お浜、——お前は下田の生れだと言ったが、吉三郎を知っているかい」

「いえ」

どんど焼

「吉三郎は相模者で、お前は伊豆いず、——海一つ向うだな、——一番

頭の与母吉はどうだ。ちよいちよいお前を付け廻したと言うではないか」

「いえ、与母吉さんは御新造さんの方で——」

「仁助は？」

「——」

お浜はそれつきり口を噤つぶんでしまいました。

「親分、娘は苦手だね」

ガラツ八は、階下へ降りて行くお浜の後姿を見送ってこんな事を言います。

どんど焼

「俺はそう思わないよ、娘は正直だ、口で言わなくたって、顔色

が物を言う」

「なるほどね、——ところで親分、この窓から帯でも下げて、男を引上げる事がむずかしいでしようか」

「誰が」

「お清さんか、お浜だ」

「それを勘次郎が黙って見ているのか」

「でも、納屋の二階から庖丁を投げるよりは確かですぜ」

「下らない事を言う」

二人はそれっきり下へ降りて行きました。

六

錢形平次はガラツ八を伴つれて、それつきり引揚げ、二三日は様子を見る気でおりました。後は小網町の仙太と、その子分共が詰め切つて、鵜うの目鷹たかの目で見張つております。

小網町の仙太は^{おおわらわ}大童でした。勘次郎が昔関係した女と、その女達を繞めぐる男を、^{しらみつぶ}風潰しに挙げましたが、何分古いことで、本人達が勘次郎の存在を忘れているのと、お清が思いのほかしつか眩り者で、近頃すっかり堅くなっていたので、この方面には何の手掛りもなかったのです。

「親分、妙なことを聞き込みましたよ」

ガラツ八がそう言つて来たのはそれから四五日経つてからでした。

「何だ、八」

「吉三郎が十四日に暇ひまを取つて帰るそうですよ」

「十四日とはどう言うわけだ、出代でがわり季節じゃあるまい」

「田舎の小正月に間に合せるんですつて」

「それつきりか」

「それから、嫁のお清さんが、銭形の親分さんに、——妙なものを見つけたから、お目にかけたい——といつていましたよ」

「フーム、それは耳寄りだ」

平次はその足ですぐ相模屋へ行ったことは言う迄もありません。

「あら、親分さん、——」

お清はいそいそと蔵くらへ案内すると、

「お浜が妙なものを隠しているんですよ」

押入を開けて、隅っこの方を指します。

「何だ、箱枕はこまくらじゃないか」

取出したのは朱塗の女枕、至って古いもので、抽斗ひきだしもなにもありません。横の穴から覗いて見ると、中に一本の紐が——

「あッ」

引出して見ると、血に染んで黒ずんだ真田紐が、さなだひも 膠にかわの中から引上げたように、ベツトリ畳の上へ這います。

「これは何に使った紐だろう」

「前掛の紐ですよ」

「男物のようだが、——心当りは？」

「——」

お清は言おうか止そうか、よほど迷っている様子です。

「それを言つて貰わなきゃ、何にもならない。もつとも、お熊か

寅松に訊けば解ることだが」

「申します、——どうも、与母吉よもきちの前掛の紐のようで」

「何？ 与母吉？」

これは平次にも予想外でした。

「その真田紐は古い品で、滅多にはありません」

「どうしてお浜がこの蔵の中へ隠したと解りなすった？」

「ちよいちよい覗いていますよ」

「フム」

お清の答は簡単ですが、至極明らかです。

「八、お浜を呼んでくれ」

「へエ——」

出て行つた八五郎、暫らくすると疾風しつぷうのようにスツ飛んで来ました。

「親分、た、大變、お浜が見えません」

「何？ お浜がいない？ 惜しいところで逃げられたか」

それから又一と騒ぎが始まりましたが、用事を言いつけられたような顔をして、表口から堂々と出て行つたお浜を、仙太の子分もツイ見逃してしまつたのです。

七

翌日、寝込んでいる平次は、思いもよらぬ客に起されました。

「親分、大変な者が来ましたよ」

ガラッ八は敷居の外から、帆ほつ立て尻じりになつて、部屋の中を覗いております。

「何だ、松の内から、借金取でもあるまい」

「そんな気障きざなもんじゃありません、お浜が来ましたよ」

「何？ 相模屋のお浜が、逃すなッ」

平次は飛び起きると、ろくに顔も洗わずに、お浜を案内させました。

「親分さん、とんだお騒がせしました。若旦那を殺したのは私で

御座います」

お浜は一と晩寝ひぼんねなかつたらしい顔を挙げて、こう言い切るのです。

「何を言うんだ、そんな事を聴くなら、早起をするものか、本当の事を言ってくれ」

平次は相手にもしません。

「これが本当の事ですよ、親分さん、私を縛しばって突き出して下さい——」

「それじゃ訊きくが、何だつて若旦那を殺す気になったんだ」

「あの晩二階へ上がって、雨戸を閉めようとすると、私をつかま

えて、厭な事を仰しやるんです」

「それだけか」

「——」

「なんだって大きな声を出さないんだ」

「御新造ごしんぞさんがいや味を言います」

「それなら、まア、お前の言う事を本当にしよう。が、刃物はどこから出した、——若旦那が口説くだろうと思って、出刃庖丁を用意して行ったのか」

「——」

「与母吉の前掛の紐はどこから出したんだ」

「――」

「サアサア、そんなつまらない事を言わずに帰るがいい。相模屋では大変心配しているぜ。唯の奉公人と違って、下田の親元へ済まないって――、一人で帰るのが極りが悪きやア、俺が送ってやろう」

平次はガラツ八といっしょに、お浜を相模屋へ送って行きましたが、何か、新しい暗示ヒントを得たものか、もういちど家の中から納屋まで、ガラツ八を手伝わせて、洗いざらい探し抜きました。

が、何にもありません。

「八、又見当が違ったぞ」

「何を捜すんで、親分」

「前掛と——もう一つは言わない方がいい」

「前掛なら前掛と言えればいいのに——これでしよう、親分」

「あ、それだそれだ、どこにあった」

「母屋おもやの押入ですよ」

「お浜こぶりの行李の中か」

「親分はどうしてそれを？」

「まさかと思ったよ」

平次はそれっきり、お浜のことを主人の勘兵衛に頼んで帰りました。

与母吉は拷問ごうもんにまで掛けられていると聴きましたが、頑固がんこに口を噤つぐんで白状せず、事件はそれっきり足踏みをして、正月十五日になつたのです。

八

「今日はどん、ど、だね」(一に左義長さぎちやう、門松や書初めや、いろいろ正月の物を焼く儀式)

「今年おふれは火の用心の御布令おふれがあつて、江戸の町ではどんど焼が御法度おふれだそうですよ」

どんど焼

ガラツ八は忌々し^{いまいま}そうでした。一つでも年中行事の減って行くのが、江戸っ子には淋しいことだったのです。

「相模屋の吉三郎が、きのう帰る筈だったが、どうした」

「仙太が止めたそうです」

「——行って見よう、少し心当りがあるようだ」

平次とガラツ八はすぐ安針町へ。

「おや、大変な煙だが」

裏口から入ると、平次はすぐ気がつきます。

「どんどが御法度で、町内で焚^{たきび}火が出来ないと言う話で、門松の

始末に困って、風呂場で焚^{たきび}いていますよ」

主人の勘兵衛がこんな事を言います。

「お店なんか大きな門松を建ててるから、こんな時は不自由なわけ
で」

「へエ——」

「門松は誰が焼いているんです」

「お浜ですよ、女のくせに、妙な事に気がついたもんで」

「あッ、それだッ」

平次は何に驚いたか、一足飛びに風呂場へ——。

「あ、親分さん」

サッと顔色を変えて立上がるお浜の手から、一と抱かかえの松と竹を

奪い取りました。

「八、納屋なやへ行って吉三郎を縛れ」

「合点」

飛んで行く八五郎を尻目に、平次の片手は女を押え、片手を働かせて門松の束たばをほぐしました。

中から選り出したのは、枝のない竹が一本、長さ六尺ほど、尖端きは泥に塗れて、黒ずんだ膠にかわのように見えるのは、紛れもない血の古くなつたものです。

どんど焼
「これだこれだ、どうして、こんな見え透すいた事に気がつか
なかつたんだろう」

「親分、——吉三郎は逃げてしまいましたよ」

八五郎はこの時空手でボンヤリ帰って来ました。

「薄情な野郎だ、女を捨てて行きやがって——」

×

×

お浜は危うく処刑しよけいされるのを、平次の情で助けられました。吉

三郎はそれつきり行方知れずになりましたが、まもなく平次の手
で捕まとつて獄門台ごくもんだいに登ったということです。お蔭かげであんなに庇かばつ

たお浜も、吉三郎に未練がなくなつたことでしよう。

「親分、あつしには薩張さつぱりわからねえ、あれは一体どうした事で？」

ガラツ八が絵解きをせがんだのは、それから大分経つてからで

した。

「吉三郎は相模者だと言ったが、実は下田の者さ。お浜に懸想けそうして江戸へ追っかけて来たが、お浜も満更でなかったんだらう、何べんも助けようとした位だから」

「勘次郎を殺したのは？」

「あの晩、お浜が、雨戸を閉めに二階へ行くと、若旦那の勘次郎が手籠てごめにしようとしたんだ。大きな声を出すわけにも行かず、揉

み合っていると、予かねて勘次郎を狙っていた吉三郎が、納屋の二階

焼どんどん
から見て、荷造に使う青竹へ出刃庖丁を括りつけ、投げ銚もりの呼吸
で向うの二階へ抛ったんだ。竹へ庖丁を縛った前掛は、与母吉が

納屋へ忘れて行ったのから、紐だけ取ったのさ」

「そんな事が出来るでしようか、親分」

「三崎や下田には投げ鉈の名人がいるよ、十間も二十間も離れたところから、岩鯛いわだいの眼を貫ぬくという手練だ、——血染の紐が見つかって、吉三郎の仕業だろうと大方の見当はついたが、庖丁くを括りつけた竹が見つかるまで、縛るわけには行かなかつたよ、——その竹をお浜が門松へ突っ込んだとは気がつくまい」

「へエ、——前掛がお浜の荷物から出たのは？」

どんど焼
「お清の嫉妬やきもちさ、納屋であれを見つけて、お浜の行李こうりへ入れたんだ、悪気じゃあるまいが、少し罪が深い」

「お浜はどんな気で吉三郎を庇かばったんでしよう」

「自分のために人まで害あやめたからさ。娘心は不思議なものだ、投げ鉞さおから紐を解いて、竿さおだけ窓から捨てて翌る日門松へ隠し、紐は蔵の中へ入れたのさ、——それにしちや、逃げ出した吉三郎は薄情だ」

「なるほどね」

「もつともなまじつか、未練を残すより、その方がよかろう。——だが、人殺しに門松を使ったのは俺も始めて見たぜ、これは誰だって驚く」

どんど焼
平次はつくづくそう言うのでした。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

どんど焼

初出―「オール讀物」昭和十一年一月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第三卷
河出書房 昭和三十一年六月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>